

別紙 4

| | | |
|----------|--------|---|
| 報告番 - | ※ - | 第 |
|----------|--------|---|

主 論 文 の 要 旨

論文題目
氏 名

| |
|---|
| Re-evaluation and expansion of the cognitive model of loneliness in the digital context : A cross-cultural comparison |
| 徐 文臻 |

論 文 内 容 の 要 旨

孤独感の認知的食違いモデル (Peplau & Perlman, 1979) によると, 社会的関係における願望水準と達成水準との間に食違いが生じる時, 人間は孤独感を感じる。孤独感は主観的経験であり, 物理的孤立と区別する必要がある。社会的関係における孤独の認知的食違いには2種類あり, 「理想—現実の食違い」(Ideal-actual), 「一般—現実の食違い」(Typical-actual) という。前者は個人内の理想状態と実際の達成水準の差を指し, 後者は自己が認識している社会平均水準と個人の達成水準の食違いを表す。先行研究のほとんどが西洋文化で行われていることから, 本論文では, 東アジアの文脈に着目し, 上記の二種類の食違いが SNS におけるオンライン交流の満足度や孤独感に与える影響を検討することを目的とする。

本論文は二つの研究から構成されている。研究1では, SNS で交流を行う場合に感じる認知的食違いを測定する方法について検討し, 日本人と中国人の SNS 利用動機を測定するため, SNS 利用と満足度尺度 (SMUGS) を開発した。研究2では認知的食違いモデルをもとに, SNS 利用における孤独感の生起メカニズムの一つの可能性を検証し, 同じ東アジア文化圏の二国を比較しながら, その孤独感の生起パターンが文化的に異なるか否を考察した。

第1章では, SNS 利用と孤独感に関するこれまでの研究を概観し, 本研究の問題と目的を整理した。まず, SNS 利用と精神的健康 (特に孤独感) に関する先行研究を総括し, 1) 方法論, および2) 理論的問題点をもとに既存の研究を整理した。2010年代以前の SNS と孤独感の研究は, 概ね SNS 上の交流についての量に着目しており, 交流の質については見過ごしていた (e.g., Burke & Kraut, 2016)。これらの研究は, SNS 上の交流について, 外部変数の影響を受けやすい利用時間や友人の数といった単純な指標を用いていた。

一方で、SNSの利用目的、交流相手との関係性、コミュニケーションスタイルなどは十分に考慮していなかった。また SNS 利用と孤独感の関連を検証した研究間に、「孤独感」と「孤立度」などの操作定義の一貫性がみられず、研究者間の恣意性が顕著であった。さらに、認知的食違いモデルは、SNS と孤独感の関係を説明する目的で策定されているものの、それを実証する試みが欠けている。その理由の1つは、認知的食違いの測定方法が確立されていないことであろう。また、認知的食違いモデルを検証した数少ない研究のほとんどは欧米文化の文脈下で検討されている。したがって、SNS 利用と孤独感を説明する上で、認知的食違いモデルが文化的に普遍であることの確証はない。実際に、SNS の利用動機、オンライン交流の評価基準および孤独感に影響を与える要因の文化差についてはほとんど検討されていない。これらの研究の欠如を踏まえて、第2章(研究1)と3章(研究2)の研究では SNS を利用する際に感じる認知的食違いを測定する改良版の尺度を作成し、モデルのフレームワークにもとづいて孤独感が生起するプロセスを検証した。

第2章では、日本人と中国人を対象とした SNS 利用と満足度を測定するための尺度を開発し、その妥当性と信頼性を検証した。研究1a では SNS の利用と満足度尺度を作成した。その結果収束的妥当性の基準として用いられた主流な尺度 (e.g., The Facebook Intensity scale : FBI; Ellison et al., 2007) と高い相関を示し、因子分析の構造もこれらの FBI と類似していたため構成概念妥当性も有していることがわかった。一方、既存の尺度と異なる点は、東アジア人に特徴的な相互依存的自己観を反映する内容が含まれており、特異性も備えている尺度である。項目の一例として「大したことでない話題でも、ソーシャルメディアを介して気軽にやり取りしたい」のように、SNS の利用動機について、自己主張よりも、東アジア人の相互依存的自己に特徴の対人志向的な動機が反映されていた。

研究1b では日本人と中国人を比較し、この尺度の通文化妥当性を検討した。多母集団同時分析を行い SNS 利用と満足度尺度の測定不変性を検証した。その結果本尺度の因子構造は日中両国で共通であることが確証的因子分析によって示され、日本と中国両国間の比較研究に使用可能であることを確認した。両文化において、因子構造は3因子であり、それぞれの因子名は「(強い紐帯間) の関係性の深まり」、「(弱い紐帯間) の関係性を広まり」および「ネットワーク内の情報収集と共有」とした。

第3章では、上述のアジアを対象とした研究の欠如を踏まえ、研究2を中心に、孤独感の認知的食違いモデルを、主要なオンラインコミュニケーション・プラットフォームの利用者を対象に、日本および中国で検証し、認知的食違いモデルの交差妥当性を検証した。

2種類の認知的食違い(理想-現実の食違い、一般-現実の食違い)が SNS 対人関係満足度と孤独感に与える影響を明らかにするために、日本人(研究2a)と中国人(研究2b)を対象とした調査を行った。その結果、いずれの文化でも認知的食違いのフレームワークを部分的

に支持する結果が確認された。一方で、同じ東アジア文化圏の国でも孤独感を影響する要因の違いが2点確認された。日本人のモデルでは、SNSでのオンライン交流の量が対人関係満足度に大きく影響したが、中国人のモデルではその影響はなかった。二つ目は中国人のモデルでは個人内の理想—現実の食違いが孤独感に寄与する一方、日本では一般—自己の食違いが孤独感の有意な予測要因であった。まず、最初の文化差は Dunbar (1992)の Social Network Size 理論から解釈した。中国人参加者は個人が有効に維持できるネットワークサイズを超える SNS 友人数を持ち、そのうち8割以上が弱い紐帯と思われ、SNSにおけるソーシャル活動の量よりも質が満足度の向上や孤独感の解消に寄与すると考えた。二つ目の文化差は、Dien (1999)の Orientation of Collectivism 理論をもとに、日本と中国の間の集団主義の形態の違いから解釈し、日本人は Peer-group orientated collectivism によって特徴づけられる反面、中国人は Authority-directed orientation of collectivism の要素を持ち、この2者の違いで結果の相違を説明した。個人の期待と現実（個人内の欲求と集団の規範）の不協和を知覚する時、日本人と中国人は異なるコーピング方略を使うのではないかと提起した。日本人は認知的不協和を解消させるために、個人のニーズを柔軟に調整する方略を取る一方で、中国人は社会規範に一時的に妥協して表面的には集団に同調しつつも、個人内では強い自己願望を持ち続けると解釈した。そのため、個人の期待が現実とかけ離れる時、日本人よりも中国人が感じる認知的不協和は精神健康に与える負の影響が大きい可能性があるとして想定した。

第4章では総合考察を行った。本研究では SNS を利用する際、オンライン交流に対する期待と達成度の食違いが孤独感に与える影響のメカニズムを比較文化の観点で検討した。本研究の最も大きな特徴は、次の2点について明らかにしたことである。第一に、孤独感の認知的食違いモデルは対面的コミュニケーションの文脈だけでなく、SNS を介したコミュニケーション文脈にも適用できること。第二に、孤独感に影響する要因は、西洋と東洋の文化差だけでなく、集団主義と一括りにされがちな東アジアの文化内において異なる点を実証したこと。

その一方で、本研究は限界についても論じ、主に次の2つについて言及した。まず、オンラインとオフライン（対面）上のコミュニケーションの関係、及びそれぞれの期待と達成度への主観的認知が孤独感に与える影響の検討がまだ不十分であること。この問題を検証するためには、今後 SNS のログなどリアルタイムの客観的データや縦断的質問紙調査が必要である。次に、認知的食違いが孤独感に影響するパターンに日本と中国の文化差が確認されたが、その文化差を説明するために用いた理論的枠組みを検証するためにはたまたま選ばれたこれら2文化ではまだ不十分である。さらに多くの集団主義文化、特にアジア圏において調査を続け、SNS 利用、オンラインと対面コミュニケーションに対する期待、主観的および客観的達成度と孤独感の関係性に与える影響を検証する必要がある、さらに文化差に影響を与える調整変数の模索も課題として残される。